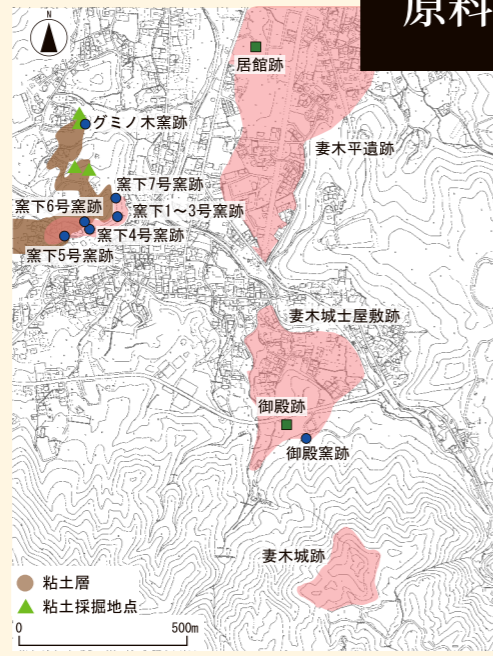


# 07 なぜ長期間操業できたか

一番の理由は原料となる粘土が近くで豊富に採れたことが挙げられます。昭和初期頃に作成された地質図には、操業年代が不明瞭ながら西山鉦山と呼ばれる粘土採掘地点が複数認められます。

二番目の理由は領主による領国経営の一環で陶工が誘致されたことが挙げられます。慶長20年(1615)、土岐郡内8ヶ村を治めていた妻木氏が久々利村大平(可児市)の陶工を自領の笠原村(多治見市)へ移住させるために様々な優遇措置を認めた史料が存在します。また、久々利村大萱(可児市)の牟田洞窯(16世紀後半～17世紀初頭)から出土した製品や匣鉢類に記された窯印(陶工集団毎の選別記号)が窯下1～3号窯と同一のものであるため、陶工が移動した事実を実際の遺物から見る事ができます。それ以前の状況は不明ですが、窯下5・6号窯が造られた15世紀中頃には、領主の城館である妻木城跡や妻木城土屋敷跡、妻木平遺跡が築かれ、窯下1～3号窯が造られた16世紀中頃は妻木城の城域が拡大化する時期にあたるため、窯と領主が何らかの関係で結びついていたと考えられます。また古窯跡群の約1.1km圏内に城館が分布する距離の関係からもそれを裏付けるものと推察されます。



## 原料そして領国経営

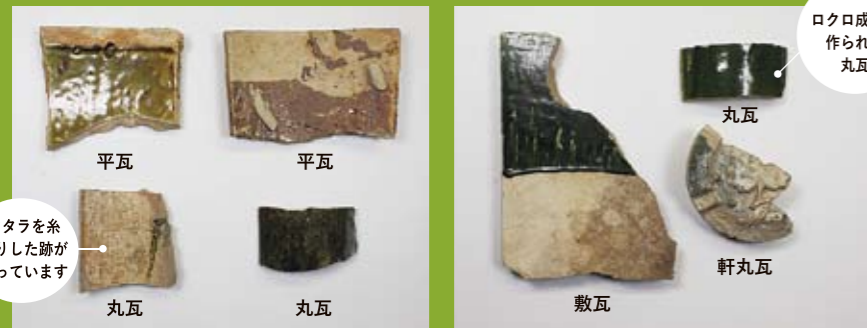


牟田洞窯跡出土の匣鉢 (画像提供: 可児市教育委員会)

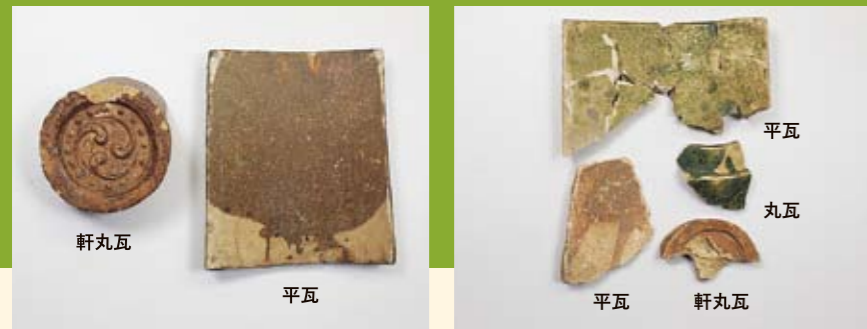


窯下1～3号窯跡出土の匣鉢

## 御用窯としての役割 - 窯下4号窯での施釉瓦生産 -



窯下4号窯跡出土 (左) 六田2号窯跡出土(瀬戸市蔵)



妻木城土屋敷跡出土 (右) 小名田窯下古窯跡群出土(多治見市教育委員会蔵)

編集: (公財) 土岐市文化振興事業団 中島茂

土岐市美濃陶磁歴史館 土岐市泉町久尻 1263 Tel: 0572-55-1245

開館時間 午前10時～午後4時30分(入館は午後4時まで)  
 入館料 一般200円(150円) 大学生100円(70円) 高校生以下は無料  
 障がい者手帳をお持ちの方と介助者1名 一般100円、大学生50円  
 \*( )内は20名以上の団体料金  
 休館日 月曜日(但し、8/9は開館)、祝日の翌日(但し、7/24は開館)

### 次回展示

特別展 小山富士夫と美濃一昭和の窯業界のあゆみとともに一  
 会期: (前期) 2021年9月17日(金)～12月5日(日)  
 (後期) 2021年12月9日(木)～2022年2月13日(日)  
 会場: 土岐市美濃陶磁歴史館 第1・2展示室

# 01 はじめに

土岐市南部の妻木町に所在する妻木窯下古窯跡群は、美濃窯の中では唯一、断続的ながらも室町時代から江戸時代という長期間にわたって、同一丘陵内で窯業生産を行っていた古窯跡群です。発掘調査が行われていないため詳細は不明ですが、東西約250m、南北約75mの範囲に室町時代の窖窯2基(5・6号窯)と安土桃山時代の大窯4基(1～3・7号窯)、江戸時代の登窯1基(4号窯)の計7基が近接して分布しています。

今回の展示では、妻木窯下古窯跡群の資料を一堂に会し、各時代の製品の特徴を紹介します。土の中に埋もれていた小さな「陶片」に焦点を当て、そこからこの窯がどんな意味を持つ窯であったのかに迫りたいと考えています。

## 土岐市の古窯

# 妻木窯下古窯跡群

2021年6月25(金)→9月12日(日)

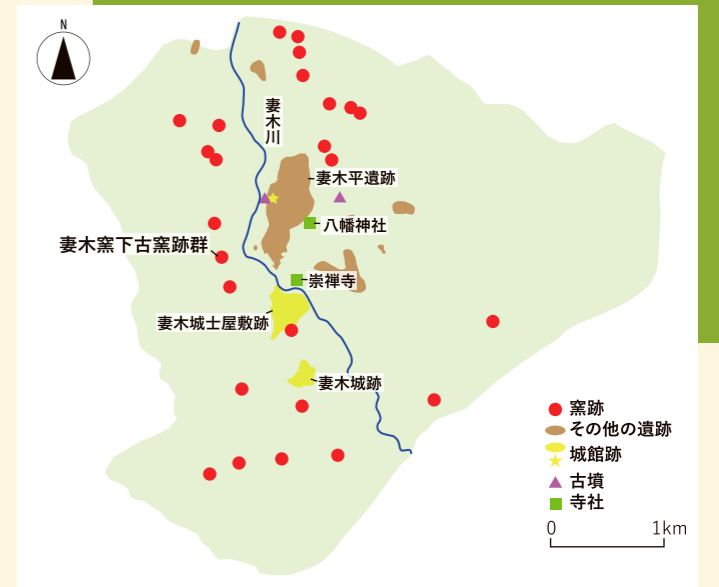
# 03 妻木町の窯業生産の開始

妻木窯下古窯跡群が操業する以前の妻木町では、鎌倉時代から室町時代(14世紀)の無釉陶器である「山茶碗」の生産から窯業が始まります。窯の構造は、丘陵斜面を溝状やトンネル状に掘った窖窯と呼ばれるものです。町内には、滅失したのもも含めると計9基あったとされ、いずれも丘陵奥地に点在しています。主に一般民衆向けの日常食器である碗や小皿を生産していました。その後、山茶碗の生産は途絶え、再び妻木町内で窯業生産が行われるのは室町時代(15世紀)の古瀬戸系施釉陶器となります。



妻木町で生産された山茶碗

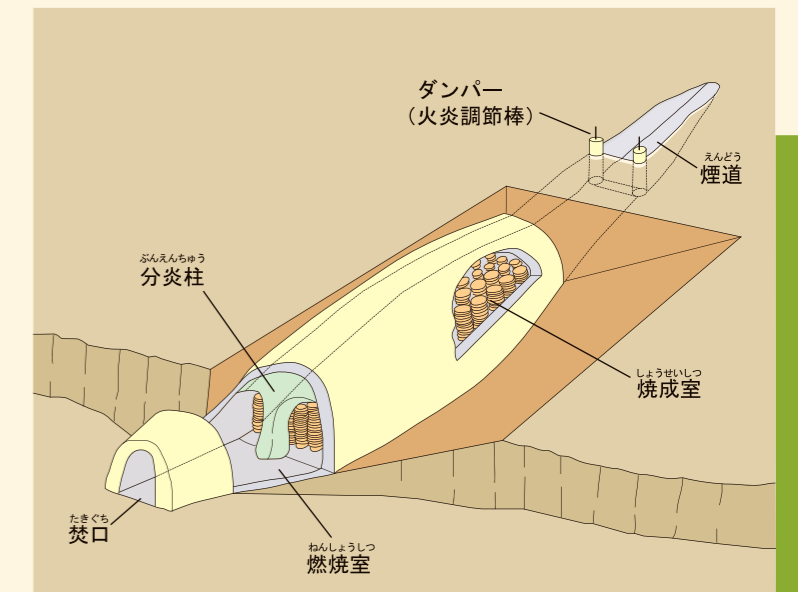
## 妻木町の遺跡・寺社の分布図



# 02 周辺の遺跡

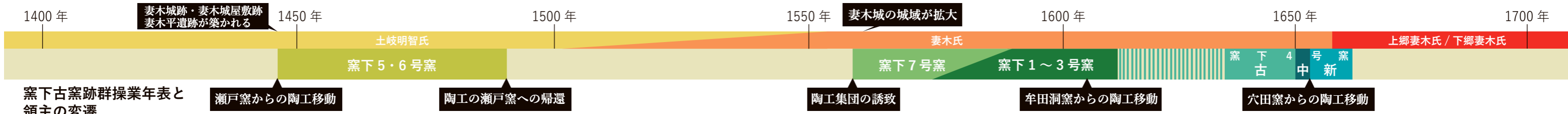
妻木窯下古窯跡群の周辺には、縄文時代から近世の集落遺跡や城館跡、古墳、窯跡などの各時代の様々な遺跡や寺社などが分布していますが、その主体を占めるのは鎌倉時代から江戸時代にかけての窯跡です。これらの多くは、妻木町内を南北に流れる妻木川を挟んだ東西の丘陵上に分布しています。

このように妻木窯下古窯跡群の周辺に多数の遺跡が分布しているのは、窯業生産を行いやすい、あるいは人が住みやすい環境であったためだと考えられます。

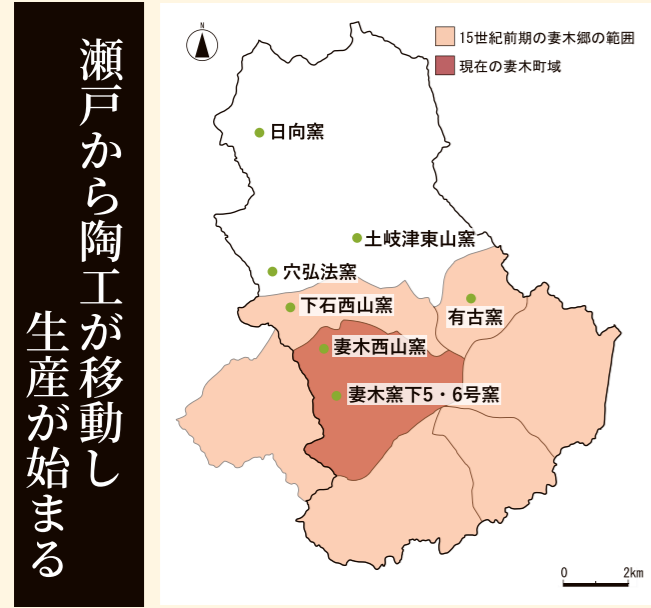


## 窖窯の模式図

東濃の山茶碗生産は12世紀から始まります。13世紀中頃から14世紀後半に生産量のピークを迎え、これ以降は徐々に減少し、15世紀中頃には極僅かとなってしまいます。



## 04 古瀬戸系施釉陶器窯－窯下5・6号窯－



窯下5・6号窯跡出土  
調理具・食膳具（播鉢、卸皿、縁釉小皿、平碗）を中心に茶道具（天目茶碗、茶壺）や仏具（仏花瓶、香炉）が出土しています。

妻木窯下古窯跡群での窯業生産は、室町時代（15世紀中頃）の古瀬戸系施釉陶器窯から始まります。「古瀬戸系施釉陶器窯」とは、平安時代末から室町時代（12世紀末～15世紀後葉）に愛知県の瀬戸窯で生産された施釉陶器である「古瀬戸」の陶工が各地に移動したことによって成立した窯です。

美濃窯は8箇所確認されていますが、全て土岐市内であり、また窯の多くは、土岐明智氏の所領であった妻木郷内に分布し、特に郷の中心地であった現在の妻木町内には計3基あることから、生産には領主権力の一定の関与があったと考えられます。

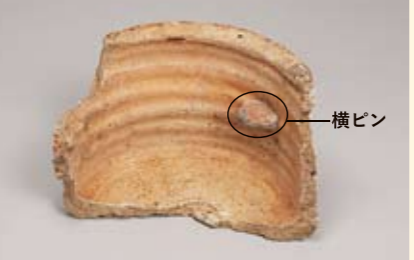
## 05 大窯－窯下1～3・7号窯－

15世紀後半、古瀬戸系施釉陶器生産者の多くは瀬戸窯に帰還します。そこで、密窯に代わる「大窯」という窯で天目茶碗や小皿、播鉢を量産できるようになります。地上に造られた大窯は燃焼効率が良く、窯の容積が拡大したことにより量産が行え、また専用の製品の出し入れ口を設けたことで作業効率が向上しました。

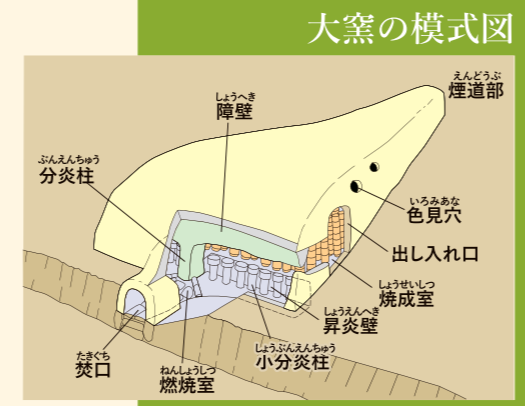
その後、大窯は16世紀前期まで主に瀬戸窯の中心部に分布していましたが、16世紀中頃に入ると瀬戸窯の外縁部や美濃窯の土岐川以南中央部一帯にかけて広範囲に展開するようになります。しかし16世紀後半には、土岐川以北の地域や土岐川以南の東部に集約されるようになります。こうした変化は、領主による領国経営の一環で、陶工集団が誘致された結果であると考えられ、その時に築かれたのが窯下1～3・7号窯です。



窯下1～3号窯跡出土



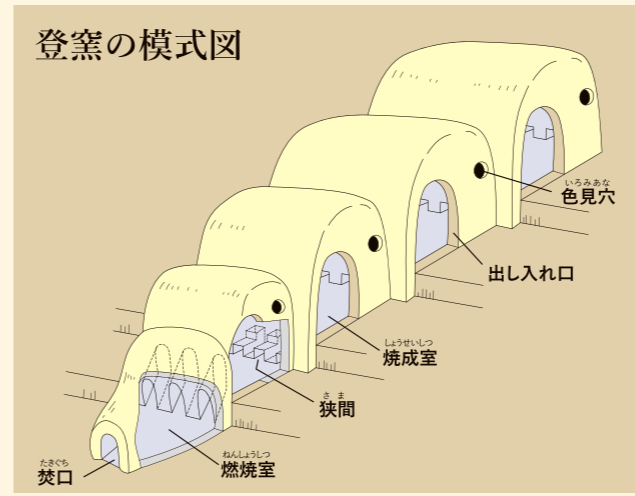
窯下7号窯跡出土（横ピン付匣鉢）



### 最新技術を持った陶工を誘致する

採集遺物の主体は16世紀後半から17世紀初頭で、17世紀前期が少量含まれています。（1～3号窯）碗や皿などの日常食器と共に瀬戸黒や志野といった茶陶の器「美濃桃山陶」が生産されています。また、7号窯では内面に横ピンが付いた匣鉢が出土していることから、操業の始まりが16世紀中頃まで遡ることが考えられます。

## 06 登窯－窯下4号窯－



窯下4号窯跡出土（古段階）



窯下4号窯跡出土（中段階）



窯下4号窯跡出土（新段階）

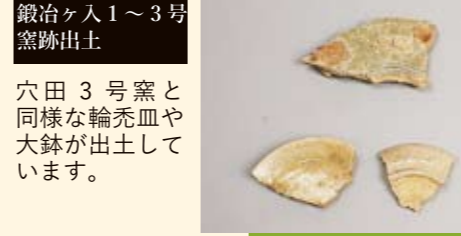
## 穴田窯から陶工来たる

17世紀前期、窯下1～3号窯の廃窯後程なくして4号窯で生産が始まります。窯の構造は登窯で、前代の大窯と比べ燃焼効率が向上し、また複数の焼成室（製品を焼く部屋）が幾つも連なっていることから製品を大量生産することが可能となっています。

出土資料から古・中・新の3段階に区分することができます。古段階は、丸碗や輪禿皿、有耳壺と共に鉄絵皿（紅葉唐草文）、播鉢、施釉瓦を焼成しています。中・新段階には、大鉢や筒形碗、鉄絵皿（蘭竹文）を量産するようになり、窯道具に小判形の匣鉢の蓋を多数用いるようになります。また新段階には、瀬戸の穴田窯の陶工が本窯に移動し、窯業生産を行ったのではないかと考えられています。



穴田3号窯跡出土（瀬戸市域）  
丸碗や鉄絵皿、輪禿皿、大鉢、片口鉢、有耳壺等を量産し、小判形の匣鉢の蓋が出土しています。



鍛冶ヶ入1～3号窯跡出土  
穴田3号窯と同様な輪禿皿や大鉢が出土しています。



有牧1号窯跡出土  
穴田3号窯と同様な鉄絵皿や輪禿皿、大鉢、小判形の匣鉢の蓋が出土しています。

## 瀬戸窯からの陶工移動 －穴田窯に関する文書史料との符合－

瀬戸市上水野地区にある17世紀前期から中期にかけて操業していた「穴田窯」に関して次のような内容の史料があります。「上水野村かま之洞で生産を行っていた4人は、同地が御林方奉行所（愛知郡及び春日井郡の山林を管理）の役人達の屋敷地となるため、各地に引越しをした」というものです。

移転先は①春日井郡半田川村、②濃州妻木村之内三本松、③同州同村之内かじがおり、④同州新牧村とあります。この地名に当たるとされる窯は①かみた窯（瀬戸市下半田川町）、②窯下4号窯、③鍛冶ヶ入1～3号窯（土岐市妻木町）、④有牧1号窯（土岐市土岐津町）です。

これらの窯から出土する製品の主要器種や窯道具が穴田窯と類似することから、それを肯定することができます。移動先の選定には、同業者の親類縁者を頼ったのものであったと考えられます。